

宮城 社会 3. 11 大震災

<大川小> 被災校舎 遺族が定時案内開始

東日本大震災の津波で児童と教職員計84人が犠牲となった宮城県石巻市大川小の被災校舎で、遺族や有志でつくる「大川伝承の会」が10日、語り部をした。一人でも多くの来訪者に震災の記憶や地域の姿を伝えようと、事前に開始時間を決めた。「あの日まで確かにあった大川地区の風景や暮らし、命を風化させたくない」と望む。

同会による定時案内は初めて。午前10時と午後2時の2回、共同代表の佐藤敏郎さん（53）と鈴木典行さん（51）ら遺族5人が語り部を務めた。同会のフェイスブックなどで知った約80人が集まり、耳を傾けた。

佐藤さんは児童一人一人が上着などを掛けているフックの写真を示した。フックの上に6年生の次女みづほさん＝当時（12）＝の名前が書かれたシールがある。「もうコートを掛けることはないけれど、大切な場所。皆さんと一緒に救うべき命、救ってほしかった命があったことに向き合っていきたい」と呼び掛けた。

5年9カ月前まで校庭があった地に雪が舞い、冷たい風が肌を刺す。鈴木さんは6年生の次女真衣さん＝当時（12）＝らが移動した方向へ参加者を先導した。「子どもたちはもっと寒い中で51分間校庭にいた。すごくつらかったと思う」

地震発生後、真衣さんは校庭で待機を命じられ、近くの北上川堤防付近（三角地帯）に向かう途中で津波にのまれた。

石巻市の石巻専修大3年志賀春香さん（21）は「鈴木さんの話を聞き、心に重くのし掛かった」と言う。

被災校舎は海から約4キロ内陸に立つ。震災前は周辺に民家やスーパー、郵便局、診療所などが並んだ。

岐阜市の公務員水川和彦さん（58）は被災校舎を数回訪れたが、遺族の話を直接聞いたのは初めてという。「子どもにとって一番楽しいはずの学校で命がなくなることはあってはならないと強く思った」と話す。

大川伝承の会は近隣の同様の団体とも連携する方針。次の定時案内は2017年1月21日の予定で、被災校舎のほか、海に近い長面地区での説明も検討している。



あの時、自分なら…大川小「伝承の会」が活動

2016年12月11日 読売新聞



東日本大震災で児童・教職員計84人が亡くなった石巻市立大川小の遺族や地元住民が語り部として、震災の教訓を語り継ぐ「大川伝承の会」の活動が10日、本格的に始まった。学校側の過失を認めた10月の仙台地裁判決後、遺族有志の語り部活動は初めて。

同会は今年2月に、遺族や地元住民など約20人で設立。これまで遺族たちは個別に語り部の要望を受けてきたが、問い合わせも多く、今回はフェイスブックで参加者を募った。今後は月1回の割合で行い、震災で水没した別の地域なども案内するという。

この日は午前と午後で計約70人が旧校舎に集まつた。同会の共同代表の佐藤敏郎さん(53)ら遺族5人が震災前後の写真を見せながら約1時間、旧校舎周辺を案内した。佐藤さんは旧校舎に残された津波の爪痕や泥まみれで児童が見つかった時の様子を伝え、「あの

時、自分ならどうしたのか、児童や教諭の目線で考えてほしい」と語りかけた。

参加者は途中で二手に分かれ、津波を回避できる可能性が高いと地裁判決が指摘した裏山に登ったり、震災時に児童が避難した経路を歩いたりした。

大学生の娘と参加した石巻市の会社員志賀由美さん(50)は「歩くことで距離感や高さなど地形がよく分かった。命の重さを改めて考えるきっかけにしたい」と話した。

次回は1月21日午前10時と午後2時から行われる。

東日本大震災

「同じ悲劇繰り返さないで」 石巻「大川伝承の会」が語り部ガイド 被災校舎前で100人に／宮城

毎日新聞 2016年12月11日 地方版



次女真衣さんら大川小児童の遺体が多数見つかった現場付近で語り部活動する「大川伝承の会」の鈴木典行さん（左端）＝石巻市釜谷で

東日本大震災から11日で5年9ヶ月を迎えるのを前に、津波で多くの命が失われた石巻市立大川小とその周辺地区の被災前後の記憶を後世に伝えていこうと、児童遺族や地区住民の有志でつくる「大川伝承の会」が10日、被災校舎前で語り部ガイドを行った。日時を決めて参加を募る初めての試みで、「同じ悲劇を繰り返さないで」と訴える遺族の声に、県内外から集まった参加者計約100人が真剣に耳を傾けた。

大川小旧校舎には、慰靈や防災学習の目的で訪れる人が年々増加しており、被災の実相を伝え、震災前の地区の暮らしや風景にも目を向けてもらおうと実施した。これまで個別に依頼を受け案内してきたが、今回は日時を同会のフェイスブックページに載せて呼びかけ、児童遺族5人が午前と午後の2回、ガイドした。

6年生だった次女みづほさんを亡くした会の共同代表、佐藤敏郎さん（53）が震災当日の学校の様子を説明し「あの日の子供、先生の気持ちになって向き合ってほしい」と呼びかけた。その後グループに分かれ、登れば助かったとされる裏山や、当日児童が移動した経路を案内した。同じく共同代表の鈴木典行さん（51）は6年生だった次女真衣さんを捜索した当時を振り返り「土の中に小さな足が見え『真衣だ』と大声で叫んだ。眼鏡をしてきれいなままで、津波で一気に押しつけられたようだった」と静かに語りかけた。

参加した岐阜市の水川和彦さん（58）は「毎年この校舎を訪れているが、遺族から直接話を伺うのは初めて。子供の未来をつくる場所で命が亡くなることはあってはならないとの思いを強くした」と話した。次回は来年1月21日午前10時と午後2時に実施する。【百武信幸】